――目　次――

1　今日も仕事が奪われる　002

2　お外で見て、見られて、　020

3　天使たちの見世物（シヨー）　034

※この作品はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

1

異端審問官エセルの一日は忙しい。
各地の村から集められた魔女候補との面談が十件。
そのあとには地方領主との会談が待っている。
とてもではないが一日で終わる量ではないのだ。
だというのに――！
「これはどういうことだろうか？　我が守護天使殿よ」
面談に設けられた村外れの小屋。
その戸口からは今延々と女たちの喘ぎ声が響いていた。
「おかえり、エセル。来るの遅いからおっぱじめちゃった。みんな教会

のシスターになるって言ってくれたよ」
笑顔で女たちに腰を打ち付けているのは、頭上に金色の光り輝く輪をもつ天使。
天使なのである。
ふわふわの金髪に蕩けるような碧眼、まさに絵画から抜け出たような美しさを持つ美少年。
（神はなぜこんな輩（やから）を天使になされたのか……！）
できることなら百回問い質したい。
いいや千回。
小屋のなかは発情した獣の匂いが立ち込め、とてもではないが、これから神聖な異端審問を行える場ではなかった。
「私の仕事を取り上げないでもらいたい！」

「えー。働きすぎなエセルのために、ぼくがラクさせてあげようと思ったのに」
「楽をさせたいのなら、なぜ天使と魔女候補が交わるのだ！」
「だってそれは、ほら……」
天使が彼女達の額に手を当てると、黒い糸が浮き出した。天使の指先が糸にふれた瞬間、真っ黒だった糸が一瞬で清廉な白糸に生まれ変わる。
「こうすれば君がいちいちめんどくさい審問とやらをしなくても、彼女たちは悔い改めてくれるし、教会は新たな働き手を得られるし、誰も死ななくて済む。有意義だと思わない？」
「まことの言葉を得られぬ改悛に何の意味があると！」
「お堅いなぁ」
天使が指を鳴らすと白い霧が生まれた。

天使の分身が何体も作り出され、おのおの女たちの相手をし始める。
本体は悠然とした足取りで近づいてくると、小屋の扉を閉めた。
「これでエセルの今日の仕事はおしまい。あとはぼくを構ってくれさえすればいいよ」
同じ背丈の美少年に迫られる。
とっくに腰は抱き寄せられ、審問官の黒衣に手をかけられていた。
「っ、私の仕事は終わっていない！　そう言っているだろう。ニアマ」
「アハ。ようやっとぼくの名前呼んでくれた」
頬ずりしてくる天使はまさに無邪気（むじゃき）の象徴だった。
今年で私は二十五になるというのに、彼は出会った時からずっと少年のままだ。
私が十五の時、礼拝堂で私の名付け親になってくれた神父の病が癒え

るよう祈っていたら、彼が女連れで現れた。
その時は恋人同士なのだろうと思っていたら、あろうことか、このヤリチン天使は礼拝堂に連れ込んだ女とまぐわい始めたのだ。
非常識にも程がある。
意を決して申し立てたところ、彼はふしぎそうに私を見つめてこう言った。
「きみ、ぼくが見えるの？」
なにを馬鹿な、と思った瞬間、彼の背中から純白の翼が広がった。頭上には眩（まばゆ）い光輪がふよふよと浮かんでいる。
まぎれもない。
本物の天使と分かって悲鳴を上げかけたら、手で口をふさがれた。
その時に息を止めておけば良かったのだ。

後悔先に立たず。
手でふさがれたとき吸い込んだ空気に、彼の神気がまぎれていた。
天使がその身にまとう神気は人が吸い込めばたちまち死ぬ。だがごく少量であれば、人の本能を高ぶらせるだけに留まる。
すなわち催淫剤だ。しかも高純度の。
「ァ、ぁ、だ……なに、これ……貴様、いったいなにを……ッ」
ガクガクと腰がふるえて立っていられず、礼拝堂のベンチにへたりこんだ。
するとニアマは興味深そうに私を覗き込んできた。
「うわ。ぼくの神気吸い込んでも生きてる……ってことはぼくが守護していい人の子ってこと？　へぇ、男の子なんだ」
ニアマが連れ込んだ女性はとっくに気絶していた。先ほどまでむつみ

あっていた相手には目もくれず、こちらに近づいてきた。
「やめ――来るな……来るなァ！」
「だいじょうぶ。怖いことなんてしないよ。きみの本能が落ち着くまでぼくが面倒見てあげるから」
言うなり審問官見習いの白服をたくしあげられ、股間をさわられた。
彼の指にふれられただけで身体に電流が走り、軽くイッた。
「へえ、大人みたいな体格のわりに可愛いおちんちんついてる。女の子は抱いたことないんだ？」
「……ッ、神に仕えるものなら当然だろう！」
「おかしいなぁ。前に地上に降りたときは複数の女の子と交わって、たくさん子作りに励むのが君たちの使命だったと思うんだけど」
「そ、ンな……戒律……聞いたことが――ッ」

ニアマの手に竿を握られる。
ぴゅぅぅうう♡♡
おもらしでもするみたいに透明な液体が噴き出し、服を濡らした。
コイツにこれ以上さわれられたらまずい。
四つんばいになって逃げようとすると、腰を掴まれた。
「人の子はぼくの神気にふれたら、鼻血を流して失神したりするんだけど、君は特別だからぼくが守護天使になってあげる」
私の知る天使はもっと物静かで穏やかで、絶対に礼拝堂で女を抱いたりしない。礼節豊かなもの、それが天使だ。
そんな常識がいま無惨にもやぶり捨てられようとしている。
「ぼくのチンコと君のおちんちんくっつけたら、契約できるから。ね」
「いい――！」

「いいってことはなりたいって意味？」
「ちが――人の話を聞け……ッ」
に、ちゅう♡♡
先っぽと先っぽがふれあった瞬間、身体が溶けた。
抱かれてもいないうちから彼に抱かれる喜びを脳に植えつけられる。
どこを突かれたら嬉しいのか、よがりくるってしまうのか、そんな情報が勝手にニアマへとばらまかれる。
「へぇ……きみは女の子みたいに乳首こねられるのが好きで、尿道ちゅーちゅー吸われるのも好きなんだ。そんでチンコの先っぽで喉ちんこ弄ばれるのも好き、と。結構ハードなのが好きなんだね。君」
「だまれ……わたしはそんなもの、好きではない！」
「えー心外だなぁ。ぼくはきみの好きなところを身体に教えてもらった

だけだよ。だからこれは君が本当に好きな場所」
耳元に息を吹き込まれて、勝手に腰が揺れる。
尻を押しつけて続きを促してしまう。
「とりあえず今日は人の子が守護天使を持つってこと、じっくり味わってイってね」
そう言って朝まで抱きつぶされたのが十年前。
以来、このヤリチン天使はことある毎に私の仕事を邪魔し、堕落させようとたぶらかそうとしてくる。
「今日は小屋の外で青姦(あおかん)ー。ぼく好きだよ。開放感あって」
「私は好かんと……あれほど！」
白い翼から抜かれた五枚の羽根が、飛びかかってくる。
黒衣のすき間に入り込まれ、胸元の乳首をいじくられた。

「あ、ァ、ゃ……はねで……胸をこねるな……ァ」
「なんで？　陥没乳首だってバレたくないから？」
ニアマが私の上着を広げて、胸を露わにする。
そこには確かに胸に埋もれた乳首があった。
「可愛いよね。エセルの陥没乳首。恥ずかしがり屋さんでさ。ぼくがきつく吸えば吸うほど沈みこんじゃって、多分エセルの身体の中でココが一番ドスケベだよね」
「うそを……言う……な」
「嘘じゃないよ。ぼくの神気一番吸い込んじゃって、今じゃあこの子使わないとお顔見せてくれないもんね」
ニュルン♡
ニアマの背中から光る触手が姿を現した。

背中から伸びるソレは一本一本に神気が充満している。そんなものでいじられたら最後、正気を保てたなくなる。
「や……ッ……それは、触手だけは……やだァ」
必死に胸にさわってこないよう手で振りはらうが、ヌルヌルと逃げられる。その間にも唇や鎖骨、脇に吸いつかれた。
（こんなことされたら、今夜も朝まで搾り取られる……ッ）
前回はひと月前。
三日三晩は寝台から起き上がれず、同僚たちにまた迷惑をかけた。これ以上続けば不審がられる。
「だ〜め。ぼく、エセルのえっちな液体不足なんだもん」
ちゅううう♡♡
両胸に二本の触手が吸いついた。太い触手の中から極細の触手が生え

てきて、それが埋もれた乳首をしゃぶり、ねぶっては、押しつぶす。
「――ッ♡♡♡」
「イイ悲鳴。もっと聞かせて」
ぐりぐりと膝で股間を押される。
足を閉じようとしたが、触手の責めが激しくなった。
乳首の狭い穴に極細の触手をさし込み、ひっかけて引きずり出される。
「ひっ……ッ♡やぁァァァ♡♡」
ぴゅぅぅうう♡♡
白い液体が乳首から飛び出す。母乳だった。ニアマに抱かれるようになってから噴き出すようになったものだ。
それをゴクゴクと音を立てて触手に吸われる。
（……はずかし……い……っ♡）

耳をふさごうとすると、手をつかまれた。
所詮、人の子が天使に勝てるはずもない。そう言わんばかりにこのヤリチン天使は強引だった。
「こうやって乳首クリクリしてあげると、エセルのおっぱい、出が良くなるの知ってた？」
「知……る、か……っ」
「ふふ。口の悪いエセルも好きだよ。ぼく」
ニアマの碧眼がすっと冷たく細められた。
「いじめがいがあって、すごく好き」
ちゅぷるん♡
極細の触手が尿道にはいり込む。
そのまま精液をつくりだす場所――精嚢にまでぐんぐんと忍び込み、

液体を吸い上げられた。
「や――ァァァ!?　だめ、じかに吸うのはダメだといっ……、……やぁァァァアアア♡♡」
ヒクヒクと尻穴が収縮し、何度も空イキしてしまう。ぐずぐずに下半身を蕩(とろ)けさせられ、ニアマの胸にもたれ込む。
そのあいだも触手は吸うことをやめてくれない。
息を吸うように精液をたんまり吸い込んだかと思えば、その身をしならせて催促してくる。
「ふふ。ぼくの言いつけ通りオナ禁してたんだ。すんごい濃くておいしいよ。エセルのえっちな精液」
「うるさ――ひンっ♡♡」
「ひと月分だからなぁ。あるだけ搾りとってあげる。そしたらエセルも

異端審問で可愛い女の子に目移りすることもなくなるもんね」
「私は……女性にそんなこと……しな――」
「本当かなあ？　こんなにえっちな身体になったら女にも男にも狙われたりしない？」
「誰のせい……だと……」
息も絶え絶えに反論すると、ニアマはにっこりと笑った。
「ぼくのせいだね。だからエセルが死ぬまで責任とって抱いてあげる」
人によっては十分な甲斐性を感じられるセリフだったが、ひと月ごとに抱きつぶされている身には迷惑この上なかった。
「――さっさと出ていけ……ッ♡」
「ぼくの触手に精液垂れ流してる状態で言われても怖くないよ。それに今日はぼくたちが出会って十年目の記念日だ。いつもよりたくさん愛し

てあげる」
ゾッとさせられる一言。
しかし逃げ道はとっくにふさがれている。
「まずは今日初めてのメスイキしようね」
にゅぷぷぷ、ちゅぅぅ♡♡
尿道を広げられ、ねぶられる。精嚢に行きついた触手が嬉しそうに吸いついて、ふるふると揺れた。
微細な振動で腰はあっという間に陥落し、もっと、とおねだりをする。
「や……ッ♡っ♡尿道の奥、コリコリするの、らめぇぇ……ッ♡」
ぷ、しゃぁぁぁ♡♡
精液が噴き出し、全てニアマの触手に飲み込まれていく。亀頭から一滴ももれることなく、すべて触手に吸い尽くされ、尻がひくついた。

まるで自分がメスになった気分にさせられる。
脳が蕩けて、ニアマに頬ずりしてしまう。
（こんな……はしたない……ッ♡）
恥ずかしさからニアマと顔を合わせられない。けれどこれはまだ序の口だ。
まだまだ続きは残っている。その事実に恐怖か歓喜か、自然と腰が揺れた。

2

「本当エセルのお尻って適度な重みがあって、やらかくて、すべすべしてるよね。ぼく、大好き」

あれから小屋のすぐ近くの木立に連れてこられ、木の幹につかまるよう命じられた。

時刻は昼。

そろそろ村の見回りの男たちがやってくる時間だった。

「安心して。エセルの肌を他の男なんかに絶対見せたりしないから」

「……そんなことより私は……務めを……っ」

「もう、ほんとマジメなんだから。たまには君も休まなきゃ。めっ。そ

れにぼくとセックスすることだって、ぼくを通じて天の父さまに奉仕するりっぱな務めだよ」

ご奉仕というのは、務めを果たしたあと三日三晩気を失うほど壮絶なものなのだろうか。

そこへ、草を踏み分ける音が響いた。

しかも複数。

「ニアマ……これ以上は！」

必死に尻を隠すよう、たくし上げられた裾を下げるが、じゃまされた。

「だ〜め。いまエセルの心臓トクトクはやくなってるでしょ。男たちに見られるかもって期待してるんだから、期待には応えなきゃ」

「――していない……！」

むしろこれは緊張からで……。

そこへ見張りの男たちの声が聞こえてきた。
「なあ、本当にのぞくのか？　目ん玉つぶされねえか」
「ばか言え。異端審問官さまだけあんなにたくさんの女たちに囲まれてんだぞ。絶対エロい事してるに決まってる」
「教会の人間はムッツリが多いもんな」
ケラケラと笑う男たちの声が木立じゅうに響いた。
ニアマが耳元で囁く。
「ほらやっぱり。君があの小屋で女たちを抱いてると思ってるよ。あの男たち」
藪（やぶ）のすき間から男たちの姿が見えた。腰が逃げを打つ。
だが退路はもう天使にふさがれていた。
「かれら、今日の異端審問の見張りすごく楽しみにしてたみたいだから、

えっちな声を聞かせてあげようね」
「待っ――！」
ニアマがひとさし指を振るった瞬間、耳に艶やかな悲鳴が響いた。
甲高い、女と見紛う嬌声。それでいて聞きなれた……。
「……、貴様！」
明らかにその声は私自身のものだった。
「エセルのえっちな声に彼らも脳みそ蕩けちゃうかも。なにせ天使とまぐわってる時の声だからね」
男たちの足が止まる。
恍惚（こうこつ）とした吐息が聞こえた。それと色欲にたかぶる鼻息も。
そっと顔を上げると、みな宙を見上げて、自分のズボンからモノを取り出していた。

全員、勃起している。
「――ッ!!」
そそりたつ肉棒を猿のようにしごきはじめた。
完全に勃起した男たちの竿を見て、身体が甘い痺れに囚われる。
「ふーん、君って見るのも好きなんだね。これは新発見だ」
首に手をかけられる。
「それで？　君が好きなおちんちんの形ってどれ？」
「……っ、そんなもの、ない！」
「いいや。あるね。絶対目を離せないタイプのチンコがひとつあるでしょ？」
あごを掴まれ、男たちの隆々とそびえる竿たちを見せつけられる。
そのなかで一際太くたくましいものがあった。

竿にはぷっくりと凶悪な筋がいくつも浮かびあがり、へそにくっつきそうなほど反りかえってる。使い込まれた色合いに腰が反応してしまう。
「……ああいうのが好みなんだ。ぼくの細くてながい竿で延々五時間も前立腺を責められてる時も、ああいうのが欲しかった？」
「――思って、ない……ッ」
「本当？　前立腺をちびちびとコリコリされるより、ぶっといのでぎゅっと押しつぶされたいって思ってたんじゃないの？」
尻の割れ目をなぞられる。いつもならすぐ指を尻穴に突っ込んでくるのに、今日は妙に焦らしてくる。
「言わないと今日はもっと長く責めちゃうよ。君の前立腺」
つぷぅ♡
指先が入口に入ってくる。でも指の腹で入口の穴を広げるだけで、決

して奥へ入ってこようとはしない。
「……お前のは……」
「なあに？」
つめたく返されて、睨み返す。
「……初めて……抱かれた時からずっと、好きだ……ッ♡」
神に仕える人間として色欲に溺れていることをあらわにするなど、絶対あってはならないことだ。
けどニアマのことは好きだ。
時々やりすぎることはあるけれど、全て私のことを思っての行動なのは分かっている。
（本当にタチの悪い……！）
もう一度見返すと、ニアマは珍しく目をみはっていた。

天使の驚いた顔など初めて見る。
「……君ってすごいこと言うね。そんなにぼくのこと愛してくれてたんだ。これは最高の記念日にしなくちゃ」
「え、ちょっ……待てっ」
ちゅぷん♡
指を容赦なく引き抜かれ、かわりにひと月前、嫌になるほど覚えこまされた竿を宛てがわれる。
「や、ソレ……入れるの、まだ、だめ……ッ」
「今日はぼくと君が出会って十周年の記念日なんだ。だからたくさん愛してあげる」
触手が乳首に絡みつき、母乳を吸いだす。唇にも太い触手を宛てがわれ、喉にまでくわえこまされた。